

# 葛谷栄一の 異見私見



型農業への先駆的取組みを展開してきた。こうした前史を踏まえ、農業・化学肥料を通常の5割以下に削減するとともに、濁水の流出防止等、琵琶湖にやさしい技術で生産された農産物を、県が

9月の22、23日に東京国際フォーラムで開かれた「オトカニツクライオススタイル展2018」は大盛況であった。有機農業の振興と同時に、有機農産物の消費拡大をねらいとする催しである。数年前から毎年この時期に開催されているが、年々賑わいを増してきているとともに、農産物やその加工品がメインであることに変わりはなく、化粧品や衣料品のブースが増えているように感じた。

数あるブースの中で筆者の気を引いた一つが「環境こだわり農産物」を前面に打ち出した滋賀県のブースである。琵琶湖は滋賀県を象徴する日本最大の湖であるだけでなく、農業は勿論のこと、歴史・文化・風土を育んできた。その琵琶湖が富栄養化に陥らない1977年に赤潮を発生。以来、琵琶湖に流れ込む窒素やリンを減らすため、県民が主体になって「石けん運動」を広げ、79年には琵琶湖富栄養化防止条例を制定。これに対応して農業分野でも肥料の適正使用や農薬濁水の流出防止等に取り組むとともに、90年代には国が打ち出した「環境保全

型農業への先駆的取組みを展開してきた。こうした前史を踏まえ、農業・化学肥料を通常の5割以下に削減するとともに、濁水の流出防止等、琵琶湖にやさしい技術で生産された農産物を、県が

環境こだわり農産物とする認証制度を2001年にスタートし、03年には「環境こだわり農業推進条例」を制定。さらには04年から「環境農業直接支払」を単県で導入・実施し、07年に国が開始した「環境保全型農業直接支払」を誘引する大きな力となった。その取組を環境こだわり米の水田面積割合で見ると、04年以降急激な伸びを示して

10年には36%に達し、その後も微増を続けて16年で45%となっている。農水省による環境農業直接支払交付金全体の20%は滋賀県が占め、郡遺付県別では最大となっている。こうした動きと併行させてブランド米「みずかみ」が生み出され、15年以降3年連続して米の食味ランキングで特Aを獲得している。まさに環境と農と食が高いレベルで一体化しつつあるともいえる。普及・拡大から質の向上・成熟化という次のステップに差し掛かりつつある。

有機農業ということでは環境保全型農業としてベルは異なるが、有機農業取組みの先頭集団を走っているイタリアの話である。この8月下旬、イタリアの農村を歩いている中で実感した一つが、有機農業が二つの方向に分岐しつつあるということである。一つは大手流通と一体になっての量産化・低コスト化を目指す動き。もう一方は小規模家族経営を主に、環境・歴史・文化を一体化させその地域特色を「有機の町」「有機地区」というように捉えながら、その取組みの軸に有機農業を位置づけ、振興していく動きである。その是非については議論はあろうが、後者の動きは次のステップを目指している。滋賀県は勿論のこと、日本農業のこれからの取組に重要な示唆を与えているように思われるのではない。

(農的社会学サイエンス研究所代表)

## 環境こだわりで地域おこし